

北の鉄道風景

Train number; 4008D

2024.5.19 17:22

1/500, f/7.1, ISO 200, f=185mm, Daylight/Sunny

7167×4778 Raw

第134回

春の匂い

春はあけぼのと清少納言は言ったが、私の場合は匂いである。しかし、それは、雪の下からやっと顔を出した黒土の臭いでも、花の香でも、若草の息吹でもない匂いである。

春霞の向こうには、畑に出る人影や鶏たちの賑やかなおしゃべりや牛の鈍重なシルエットなどがあるのだが、幼少期の私の低い視線ではいつも菜の花越しになった。だから、

小さい私を抱きしめていてくれるこの匂いは菜の花の匂いなどと勝手に決めてつけて私の中では「春は菜の花」にもなっていた。後年、菜の花に顔を近づけてもあのウキウキする匂いはせず、色恋なんてそんなもんだと知ったような口をきく青年期を迎えた。

単純な青年は、美人は遠く眺めるものと言わんばかりに、黄色い花たちを傍に配し、大好きな蒸気機関車を主題に春らしい写真を撮る、なんていうことをすぐに思いつく。高校一年の春、高価なカラーフィルムをカメラに詰めて、菜の花畑が広がる河原に立つ



蒸気機関車でなければ表現できない春の写真を求めて行き着いたのが、春一番との共演だった。これは、近代車両では望むべくもない。
室蘭本線 1975



写真と文＝眞船直樹

と、冷凍車の白い連なりを引き連れて長い貨物列車がやってきた。はるばる釧路から東京市場に向けて最速で北の海の幸を運ぶ鮮魚列車だ。それを牽く逞しい黒が黄色い花たちの向こうを駆け抜ける瞬間、私はシャッターを切った。

できあがった写真は、他愛のないものだった。菜の花たちの黄色は鮮やかだが、機関車は真つ黒に潰れて背景に同化してしまっていた。彩度と明度の落差が大きすぎたのだ。その後も何度か挑戦はしたが、ろくな成果が上らないまま蒸気機関車は消えていった。

それに比べると近代車両は菜の花と組み合わせが楽になった。それでも、派手同士、きれい同士では画面上で喧嘩になってしまう。ちょうどいい塩梅あんばいにはいかないものかと独りごちるなかで、菜の花や月は東に日は西に、という句が頭をよぎると、ファインダーを特急が駆け抜けるのがシンクロした。幼少期と同じように草むらに座り込んでから八時間経っていた。長く感じなかったのは、きっと春の匂いのせいだったのだと思う。